world-architects
eMagazine

世界中の建築設計事務所を訪れる「Studio Visits」シリーズ。
オーク表参道のCOACHを設計されたことで話題の、レム・コールハース率いるOMAのニューヨーク事務所のパートナーを務める重松象平氏にお話を伺いました。オフィスの様子や、世界各地で進行中の最新プロジェクト、実現されなかったプロジェクト等々を紹介しています。

Studio Visit: OMA NY

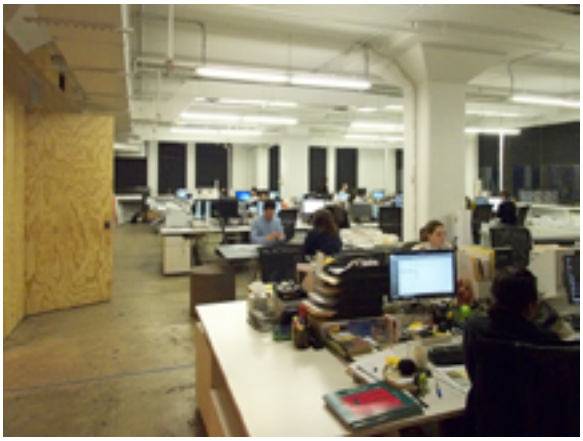
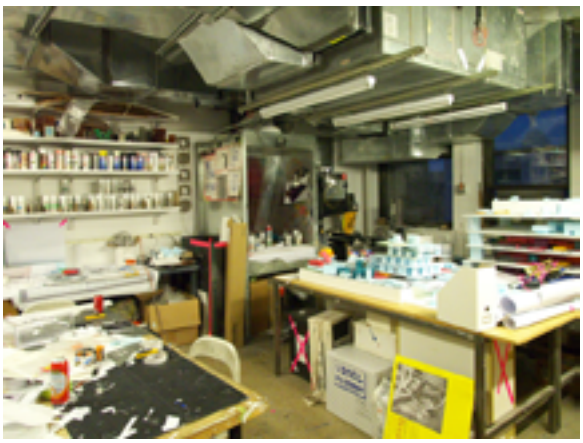


photo: OMA NY Studio. Photo: John Hill/World-Architects

OMAは、レム・コールハースによって1970年代中盤に設立された300人を超える大きな建築事務所であり、OMA NYは世界に4つある事務所のうちのひとつである。メインオフィスはロッテルダムにあり、残り2つは北京と香港にある。そして現在5つ目がドーハに計画されている。ニューヨーク事務所では現在40人が働いており、空間は基本的にオープンで、フラットな事務所の気風を反映している。事務所空間の二面は窓で、残り二面は会議室とサービススペース（キッチン、模型室、倉庫）となっている。第一印象は、世界で最も有名で評価されている事務所の一つにしてはとても地味だというものだった。

photo: Pin-Up Wall. Photo: John Hill/World-Architects

このオープンな雰囲気は、サービススペースと事務所スペースを分ける合板の壁からも感じられる。入口から窓まで続いているこの間仕切り壁は、壁とドアの境目を曖昧にしている。表面がピンナップスペースとして使われており、これによって所員の間で事務所内のさまざまなプロジェクトについての情報が共有されている。



Model shop. Photo: John Hill/World-Architects

OMAはとりわけスタイロフォームの模型で有名であるが、それは実際に、元所員をはじめ多くの建築家の間で使われるようになった。数々の道具や材料が雑然と置かれてはいるもののOMAの模型室は効率のよい場所である。重松氏は、建築家はプロジェクトの初期段階においては自らの手を使って作業する方がよく、コンピュータなどを利用した模型作りは、それらが十分になされた後のプレゼンテーションのときのためだけだという。

425 Park Avenue. Image courtesy of OMA

続いて重松氏は、会議室で現在進行中のプロジェクトをいくつか紹介してくれた。最初に説明してくれたプロジェクトは、マンハッタン・ミッドタウンの425パーク・アヴェニューの招待コンペティションで、ザハ・ハディッドやリチャード・ロジャースと争い、ノーマンフォスターに敗北。OMAのデザインはマンハッタンの伝統的な高層ビルの構成を尊重しつつ、その頂部をセントラルパークに向けてねじるというものであった（上記写真参照）。重松氏は自身のデザインにも誇りを持っていたのだが、街のデベロッパーの保守的な体質を軽んじて負けたことに失望したと語った。しかし、東22丁目23番地のプロジェクトや街の西側で進行中のBIGのW57のプロジェクトなどの事例を見るとわかるように、このような事はあまり一般的ではない。

Raleigh store. Photo: John Hill/World-Architects

2011年に提案された425パーク・アヴェニューやコーネル大学ミルスタインホールと比べて、最近竣工したものは驚くほど小規模だ。その一例が、ノースカロライナのジーンズメーカー、ラリー・デニムのショップである。重松氏は、ラリー・デニムのデザイナーたちが自ら手掛けた本店のユニークなインテリアデザインに影響を受けたそうだ。重松氏は、ファッションデザイナーの方が建築家よりも製品を見せる空間をつくる事に長けているという。そして、本店のインテリアデザインから発想を得て、「キュレートリアル・グリッド」と呼ばれる、服を吊るしたり茶色い紙飛行機のようなデコレーションを取り付けたりするきっかけとなった。OMAは、1年や2年ごとに取りかえる必要のあるデザインするのではなく、ラリー・デニムが自由にインテリアを修正できるような仕組みを設えたのだ。それは、ショップの空間に自らのデザインを埋め込もうとする建築家の姿勢と異なる、新しい商業デザインの考え方である。

Coach Macy's. Photos: John Hill/World-Architects

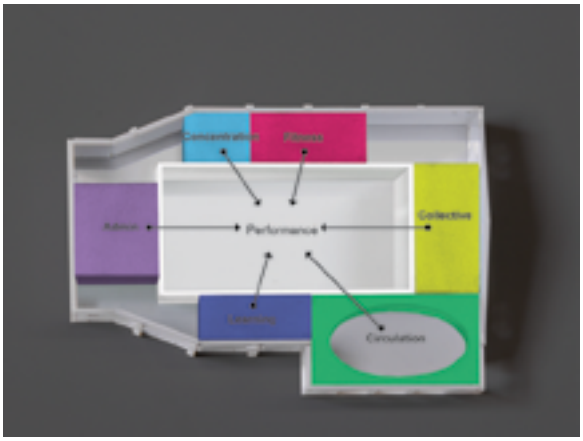
2番目のプロジェクトは、革製品ブランド、コーチのヘラルドスクエアのメイシーズにある店舗である。百貨店のメイシーズは 1ブロック分の店舗を500万ドル以上かけて改修したのだが、その中でもっとも重要な課題のひとつが、いくつもの高級デザイナーズブランドが周囲にブティックを構える34丁目とブロードウェイに面するメインエントランスを変えることであった。コーチは売り場面積が減ってしまったのだが、重松氏は限られた面積でもより多くの商品を並べることができると考えた。OMAはLED照明を埋め込んだ特注のアクリル棚を許容範囲を超えた高さまでつくる計画をし、メイシーズはこれを許可した。これはOMAがただ規制の中で設計するだけでは満足しないことを示すと同時に、コーチとの長期にわたる関係の始まりとなった。

Coach Omotesando, Tokyo. Rendering: Courtesy of OMA

重松氏がメイシーズのためにデザインしたアクリルボックスは、2つのことに寄与している。一つは、さまざまな種類の革製品を生産・販売しているというコーチの特性に応え、もう一つはブランドのさまざまな店舗のデザインに一貫性を与えることである。アクリルのモジュールはコーチ製品のサイズによって決められており、店舗オリジナルのライブラリ・ファイル・システムでもあるが、鞄や様々な製品を展示することにも役立っている。アクリルボックスは、ラリー・デニムにおける鉄のフレームのようでもあるが、その外観は箱の中に何を置くのかによって異なるのである。OMAとコーチとの次のプロジェクトは、東京の表参道に4月にオープン予定の店舗である。（現在はオープンしている。コーチ表参道店についてのレポートはこちらを参照：http://world-architects.blogspot.jp/2013/04/omacoachomotesando.html）このエリアはルイ・ヴィトン、プラダ、トッズなどSANAA、青木淳、ヘルツォーク＆ド・ムーロン、伊東豊雄といった有名建築家が設計した建築が建ち並んでいる。コーチの店舗は伊東豊雄設計のトッズの建物のすぐ隣の建物の1、2階を占める（上画像参照）。

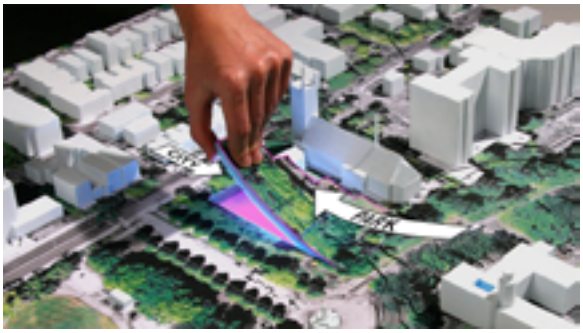
Marina Abramovic Institute. Rendering courtesy of OMA

昨夏、重松氏はコーネル大学建築芸術計画学部のニューヨーク校で講演を行なった。彼は、近作や進行中のプロジェクトで、文化施設だが公共のものではなく、「衝突と繁栄をもたらす力強い個人」によって進められている例を取り上げた。これらの中には、カニエ・ウェストの昨年カンヌでつくられた７つのスクリーンを持つ仮設パヴィリオンや、アルゼンチン人ホテル経営者のためのアートプロジェクト、そしてニューヨーク・ハドソンのマリーナ・アブラモヴィッチ・パフォーマンス・アート・センター（MAI）などがある。



Marina Abramovic Institute. Rendering courtesy of OMA

MAIはこれらの文化的プロジェクトの共通点を端的に表している。例えば、アーティストであるマリーナ・アブラモヴィッチのような強力な個人がいることで、建築的プログラムは多くの点で標準的なものから大きく逸脱している。MAIは単なるパフォーミング・アーツ・センターではなく、来訪者が長時間のパフォーマンス（6時間以上）に参加し、事実上アートワークの一部となるよう訓練するための教育施設でもある。中央のパフォーマンススペース（その規模と位置は劇場やテニスセンターといった以前の建物の機能によっている）は、教室、図書室、寝室、空中浮遊室、クリスタルルームなど（すでに述べたように、ふつうの人が思い浮かべるようなプログラムではない）他のすべての部屋から見下ろされている。マリーナ・アブラモヴィッチは、昨春このプロジェクトはOMAニューヨーク事務所が設計すると発表し、今年後半の着工を目指して資金集めを開始した。



Musée National des Beaux-Arts du Québec. Photo courtesy of OMA

プロジェクトの多くは完成までにまだ時間を要するが、2010年にコンペに勝利したケベック国立美術館（MNBAQ）は、竣工に向けて順調な道のりを進んでいる。この建物の形はミルスタインホールの大胆な片持ち構造と共通しているが、少しずつ階段状にずらされた3層の建物が閉じられたパブリックスペースを作り出している。そして街に面したこの広い空間の反対側では、上のダイアグラムで描かれているように公園が屋上にまで延長されている。

Musée National des Beaux-Arts du Québec. Rendering courtesy of OMA

この階段状と片持ち構造の建築言語はまた、東22丁目23番地のプロジェクトにも見ることができる。ここでは周囲の高いビルと同じように、ワン・マディソン・パークを見渡している。重松氏の手にかかると、形式的な整合性を柔軟に捉え、建物の需要にも合致させることができる。そして東22丁目23番地のタワーは巨大な建築群の中の一つに組み込まれることを逃れ独自のデザイン性を保持している。一方でミルスタインホールでは、片持ち構造がバラバラの建物を一体的に見せ、またMNBAQでは、街と公園が一体となって階段状のギャラリーを形づくっている。これらのプロジェクトを見ていくと、おそらく、重松氏は435パーク・アヴェニューのコンペの敗北からすぐに立ち直り、斬新なこれらのアイディアはしかるべきところで実現されるであろう。

Musée National des Beaux-Arts du Québec, glass wall mockup.
Photo: John Hill/World-Architects

ソーホー事務所で重松氏と数時間過ごしたあとの私の最終的な印象は、OMAが関わる国際的なプロジェクトから小さなプロジェクトまでに渡る幅広い事務所の仕事が、ニューヨークの建築家たちの活力になっているということだった。重松氏とOMAとの5年間にわたるパートナーシップ、そしてNY事務所の仕事の 80%が重松氏によるものであることを考えると、デザイナーズブランドのブティックや店舗が文化施設と同様に世界的に見ることができるのは何ら意外な事ではない。メイシーズのコーチや表参道の店舗で明らかなように、重松氏の指揮の下、OMA NYは、目の前の問題に対処するだけでは満足せずに、多岐にわたる方法で、よりすばらしい変化をもたらすために調査し、分析し、デザインしているのだ。

OMA

OMAは世界を代表する建築、都市計画、文化分析に携わる事務所である。OMAは世界中で知的形態を主張する建築やマスタープランの実現を目指しており、また一方で機能や日々の使用の新たな可能性を提示している。OMAは30以上の国々にプロジェクトを持っており、事務所はロッテルダム、ニューヨーク、北京、香港、そしてまもなくドーハに開設される。OMAの対になるものとしてAMOがあり、メディア、政治、再生可能エネルギー、テクノロジー、出版、ファッション、マイクロデザイン、文化諮問といったことに関わる調査やデザインを行なう事務所である。

重松象平氏は1995年に福岡の九州大学建築学科を卒業。アムステルダムにあるベルラーヘ・インスティテュートで勉強したのち、1998年よりOMAに勤務している。

OMAに在籍中、ホイットニー美術館、ロサンゼルスのブロード・アート・ファンデーション、サンフランシスコの近代美術館（SF-MoMA）などの主要な施設の設計コンペに数多く関わり、2002年CCTV（中国中央テレビ）本社ではプロジェクトアーキテクトとして基本設計の終わりまで携わり、中国・深圳の深圳証券取引所（SSE）のコンペではOMAを勝利に導いた。

ミウッチャ・プラダがデザインした100以上のスカートを取り上げた世界巡回展「ウェイスト・ダウン」のデザインもしており、この展覧会は東京で始まり（2003年）、その後上海（2004年）、のニューヨーク、ロサンゼルス（2005年）、ソウル（2009年）を巡回し、ロンドンと上海のプラダのエピ・センターの設計をも率いた。

2006年にOMA*AMOニューヨークのディレクター、2008年にパートナーに就任。重松氏の指揮の下、ニューヨーク事務所はカニエ・ウエストとのコラボレーションによるカンヌでの7つのスクリーンを持つ仮設パヴィリオンや、コーネル大学の建築芸術計画学部の増築、ミルスタインホールのコンペの勝利を果たした。

現在ニューヨーク郊外でマリーナ・アブラモビッチ・パフォーマンス・アート・センターの設計、マイアミの文化施設の設計、ケベック国立美術館の建設に中心的に関わっている。

最近ではエジンバラとニューヨークのTEDカンファレンス、アメリカや日本の大学において講演をしており、彼の作品をかたちづくるリサーチやアイデアについてていねいに語っている。

コロンビア大学建築都市計画歴史保存学部大学院、ハーバード大学デザイン大学院、コーネル大学建築芸術計画学部、京都造形芸術大学の客員教授を務めている。

John Hill | 02.11.2013（翻訳：伊藤達信）